

- 巻頭対談 2
FUJITSUファミリー会
佐藤新会長・富士通 時田社長
これからの社会で期待される
FUJITSUファミリー会の役割と存在意義
- ICT基礎講座 6
AIブームで人気が高まるPythonとは
～今さら聞けない、
プログラミング言語の世界を知ろう～
- 支部見聞録(東北支部) 10
From 東北
[秋季大会連動版]
- HUMAN HUMAN 14
東京大学大学院工学系研究科システム
創成学専攻教授
東京大学総合研究博物館・兼任
宇宙ミュージアムTeNQリサーチセンター長
宮本 英昭氏
- Family's Information 15
- 支部活動紹介 16
オンラインセミナー

Family 2020 **396**号



表紙のこぼれ (こどもとスポーツ)

東京大会で正式種目として採用されたサーフィン。自然の海が舞台で、サーフボードを使って波を乗りこなすテクニックを競う。技の種類や組み合わせ、難易度、オリジナリティ、スピードなどの要素で採点する。1つの試合で10本前後の波に乗り、そのうち点数が高い2本の合計点で争う。良い波をつかみ、高度な技を成功させると高得点につながる。



巻頭対談

これからの社会で期待される FUJITSUファミリー会の 役割と存在意義

この度、2020年度のFUJITSUファミリー会会長に佐藤氏が就任されたのを機に、ファミリー会の今後をテーマに、富士通 時田社長との対談を行いました。コロナ対策のためソーシャルディスタンスを保つための対談となりましたが、旧知のお2人だけあって、DX(デジタルトランスフォーメーション)への意欲やアフターコロナ社会への対応などについて、活発な議論が交わされました。

2016年スタートの 開発プロジェクトが培った 両者の絆

時田: まずはファミリー会の会長という重責をお引き受けいただき、ありがとうございます。これから佐藤さんのお力で、ファミリー会と富士通とのつながりがより強まることを期待しています。

佐藤: ありがとうございます。微力ながらご期待に添えるよう頑張ります。時田さんとの出会いは、確か2016年の富士通フォーラムの懇親会で、当社の新システム構築について相談させていただいた時でしたね。

時田: そうですね。当時、私はロンドン赴任前、金融SEの本部長でしたが、非常に斬新なアイデアと共に、佐藤さんの「保険業界を変えていくんだ」という力強いメッセージをいただき、圧倒されながらも「全力でお応えします」と約束したことを覚えています。

佐藤: それから半年間の準備期間、さらにプロジェクトが始まってからの定期的なミーティングと、時田さんとは非常に濃い時間を共有させていただきました。普段は実直で大人しいのに、いざシステムの話となるとズバッとモノを言われる人柄に、自分と似たものを感じました。

時田: そうですか(笑)。私としては、佐藤さんはエネルギーが豊富な方という印象が強くて、あのプロジェクト

でも、本来なら富士通がお客様のIT化を引っ張らないといけないところが、むしろお客様の熱意に引っ張られた気がしました。

佐藤: 時田さんは富士通の社長に就任されて、「IT企業からDX企業に変わる」との方針を打ち出されていますが、今思えば、あのプロジェクトはDXの先駆けともいえるかもしれませんね。

時田: 生命保険の営業プロセスをITで革新するという取り組みは、まさにビジネスプロセスの転換であり、富士通が目指す方向に後押しいただいたような気がします。

佐藤: おかげ様で昨年8月に無事に稼働を迎えることができましたが、これも時田さんはじめ富士通のSEの皆様にもいろいろおかげだと感謝しています。

国内最大のユーザー会、 FUJITSUファミリー会への 期待

時田: ファミリー会は4,200団体以上の会員数を誇る、ベンダー系のユーザー会としては国内最大の組織ですが、この規模の大きさは非常に重要な意味があると思っています。ダボス会議に出席した際に感じましたが、企業が社会貢献を考える際に、やはりスケールを伴わないと影響力がなく、課題解決へのムーブメントにもつながりません。ファミリー会の持つスケールは、富士通、そして会員企業



富士通株式会社
代表取締役社長
時田 隆仁

FUJITSUファミリー会会長
第一生命情報システム株式会社
代表取締役社長
佐藤 智氏

それぞれが、いろいろな可能性にチャレンジする土台になりうるでしょう。

佐藤:ファミリー会の会員に限らず、日本企業は欧米企業に比べてITを使いこなせていない印象があります。こうした現状を変えるには、富士通のようなベンダーと、私たちユーザー企業の緊密な連携が不可欠です。ファミリー会の会員企業は多様な業界・業種にまたがり、それぞれ異なる課題や要望を持っているので、そうした声をうまく吸い上げ、富士通に伝えていくことが大切になるでしょう。時には無理な相談もあるかもしれませんが、時田さんならきっと受け止めてくれると思います(笑)。

時田:日本は多くの社会課題を抱える課題先進国といわれています。4,200を超える事業体が課題を共有し、その解決へのムーブメントを生み出せば、これはものすごく大きな力になるはずです。欧米にもすぐ追いつけるだけの力を秘めていると思っています。

佐藤:おっしゃる通り、スケールは重要ですから、会員数を拡大していく取り組みも必要ですが、ベースとなるファミリー会そのものの魅力を高めていくことも大切ではないでしょうか。私自身もそうだったように、

企業のIT部門は社内という殻に閉じこもってしまいがちですが、ファミリー会に参加して、多様な業種・業態の方々と対話することで、多くの気づきやヒントを得ることができます。そんな“触発の場”であることが、ファミリー会の魅力であり、存在意義だと思います。

時田:富士通と会員企業が、さらには会員企業同士が、互いに補い合っ
てイノベーションを生み出す、ファミリー会にはそんなエコシステムとして機能することが期待できます。ファミリー会を通じて日本企業全体がITをより高度に活用し、DXを実現していけば、日本の産業界全体の競争力を高め、国際社会で大きな役割を果たしていけるでしょう。

変わりゆく富士通の姿を DX実践のサンプルに

佐藤:今、富士通は時田さんの号令のもとDX企業への転換を図られていますが、ファミリー会の会員企業にとってもDXが課題解決のための選択肢に入ってきます。ただ、自分の力だけではDXを実現できないので、富士通やファミリー会がそのためのパートナーとなりうるかが問われると思います。

時田:富士通がDX企業になるうえ

で、一番大切なのは、我々自身がDXを実践すること。そこで昨年から社内の制度や組織、経営方針、ITシステムなどの刷新に取り組んでおり、この取り組みは会員企業にとっても参考になるはず。富士通内でのDXの成果を、会員企業へのソリューションとして提供できるようにしていきたいと思っています。

佐藤:大変だとは思いますが、まさに富士通という会社の業種が変わるほどの変化になりそうですね。その成果が、会員企業にも波及するよう期待しています。

時田:富士通の変化は営業体制にもおよんでいます。お客様にとっては必ずしもポジティブな変化ではないかもしれませんが、すべてのお客様に同様の対応ができていくかという課題もあります。私たちの変化を、ファミリー会にも積極的に伝えていきますので、ご意見やご要望があれば、ぜひ、忌憚なくお伝えいただければと思います。

会報Familyを 双方向コミュニケーション の場に

時田:富士通と会員企業のコミュニケーションの柱の一つに会報Familyがありますが、誌面を通じたディス



カッションをもっと強化できないでしょうか。前号に掲載された論文集を読みました。富士通のソリューションを活用した成功事例を共有いただいて嬉しい反面、よりよくするための意見や要望など、ネガティブな意見も遠慮なくぶつけて欲しいと思いました。

佐藤: 読者としての立場からいえば、これまで会報Familyを通じて、様々な知識やアイデア、ヒントを得ることができました。今後は提供する立場から、それらがより多く得られるような会報のあり方を考えていきたいと思います。

時田: 4,200超の事業体と、世界に13万人を数える富士通グループ社員とをつなぐツールとして、会報Familyをさらに進化させてもらいたいですね。富士通の持つデジタル技術を活用すれば、誌面のデジタル化やWebサイト、動画との連動など、様々な方向からコミュニケーションツールとしての進化を図っていけるでしょう。

佐藤: デジタル化することで、より双方向的なコミュニケーションも可能になりますので、いろいろと検討していきたいですね。

コロナ禍がもたらした “気づき”を新たな ソリューションにつなげる

時田: 今回のコロナ禍は、富士通にも大きな影響がありましたが、ある意味で“気づき”をもたらしてくれたともいえます。例えばテレワークですが、これまでも「働き方改革」という文脈で仕組みを構築していましたが、コロナのインパクトに対応するには十分な規模ではありませんでした。ネットワークの増強などで大変苦労しましたが、現在はストレスなく使用できる環境が整い、そのメリットを実感しています。

佐藤: 私も半分ほど在宅勤務になりましたが、通勤がないというのは大きなメリットですね。また、在宅で完結する仕事意外なほど多く、「出社する必要があったのか」とすら感

じましたが、注意しないと働きすぎてしまいますね(笑)。

時田: おっしゃる通り、時間のロスがないというのは本当に効果的です。日本ではテレワークは馴染まない、やりづらいといわれていたのですが、コロナによってやらざるを得ない状況になると、意外とできてしまう。これを個人でなく、関係者全員が認識したというのは大きなインパクトでした。今後は、テレワーク環境を各社の規模や使い方に合わせて整備できるかどうか、企業の生き残りを左右するくらい重要な経営課題になるでしょう。

佐藤: テレワークをやってみて思うのが、デジタル化が進めば進むほど、どのようにリアルを挟んでいくかが問われるということ。すべてをデジタルに置き換えることはできないと思うので、本当に必要なリアルの価値をきちんと示すことが、企業にとってのソリューションになるのではないのでしょうか。

時田: 確かに、精神衛生や健康面での問題など、デジタルだけでは解決できないことも体験できました。富士通にも労働時間を管理するソリューションがありますが、それは今までの働き方を前提としたものです。今後は時間を管理するだけでなく、上司と部下など組織内での関係性をオンライン環境下でいかに再構築するか、私たちITを提供する側の想像力が試されていると感じています。

コロナ後の社会で 求められる 新しい価値とは？

時田: コロナ禍を受けて、メディアからは「富士通のようなITベンダーにとってはチャンスではないか」とのインタビューもありましたが、一概にそうはいえないと思います。お客様にとっては、これまで使ってきたITシステムに対する価値基準や目線が、コロナによって大きく変わっていくことが予想されます。これまでとは違う価値観で判断されるため、むしろベンダーへの要求は一

層厳しくなるとお答えしました。

佐藤: 新たな環境下での事業継続や生き残りを賭けて、優先的にすべきこと、捨てるべきことを真剣に考えざるを得ない状況に追い込まれたといえますね。当社でもいくつかのプロジェクトを計画していましたが、コロナ禍を踏まえて優先順位を再検討した結果、中止したものもあれば、これまででなかった計画が浮上したものもあります。

時田: まさに、コロナによって判断基準が大きく変わったわけですね。こうした変化は、私たちにITベンダーにとって決してネガティブなものではありません。ITへのニーズがなくなったわけではなく、ユーザーがITに求める価値が変化しただけのこと。むしろ、ほかのベンダーで進めてきた計画が、目的や価値観が変化することで富士通にとってチャンスになるかもしれませんので、そこは積極的に取り組んでいきたいです。

FUJITSUファミリー会 会員へのメッセージ

佐藤: 会員の皆様にお伝えしたいのは、ただ加入しているだけでなく、ファミリー会を使い倒してもらいたいということです。先に述べたようなファミリー会の存在意義を理解して、積極的に参加してもらい、自分たちに役立つ何かを吸収してもらいたいですね。そうした姿勢でファミリー会に参加する方が増えることで、「ニューノーマル(新しい常態)」ではないですが、「ニューファミリー会」ができるのではないかと考えています。

時田: 富士通のパーパスは、イノベーションで信頼をもたらし、世界をより持続可能なものにする。会員団体の皆様には、ぜひ、このパーパスに共感いただき、富士通と共に日本を、そして世界を、より持続可能なものにしていこうと声を上げてくださることを、切に願っています。その声を佐藤さんと共にしっかり受け止めていきたいと思っています。

佐藤: 特に期待したいのは、若手の

方々の声ですね。従来のシステム開発では、経験や実績が問われる傾向がありましたが、近年のデジタル領域は新しい技術が次々と生まれていて、過去の経験がかえって妨げになる場合もあります。社内を見ていると、しがらみのない若い人たちの方がのびのびやっていて、例えばテレワークでも、最も熟達しているのは新入社員ではないかと思うくらいです。

時田: 若手の方々は、むしろ経験のないことが大きな武器となりますよね。経験は時にしがらみになり、どうしても過去の延長線上で考えがちで、新しい発想も生まれづらくなります。もちろん、ベテランの方にも、これまでの発想にこだわらず、勇気を振り絞って新しいことにチャレンジしてもらえればと思います。

佐藤: 特にDXへの取り組みは、今までの経験がモノをいわない世界です。年齢や実績に関係なく、一斉にスタートラインに立つわけですから、若い方ほど伸びていくチャンスが大きいといえます。このチャンスを大いに活用し、ファミリー会の研究会で新しい知識や発想を身に付け、それを持ち帰って社内に伝播する役割を果たして欲しいですし、それができるファミリー会でありたいと思います。

時田: やはり大切なのは、自ら「こうやりたい」と声を上げることですね。富士通もそうですが、日本企業の若手社員はみんな真面目ですが、逆にいえば、あまり声を上げないという欠点にもなりかねません。コロナによって変革を余儀なくされた今こそ、積極的に声を上げて、日本のため、世界のために貢献してやるんだという情熱を見せて欲しい。ファミリー会の会員企業から、そんな声が上がってくることを期待していますし、その声を富士通がしっかりと受け止め、日本発の新しいイノベーションを次々と生み出せるようにしたいと思っています。

※誌面に収まりきらなかった対談の全文は、新設「FAMILY ONLINE」にて動画でご覧いただけます。詳細は本誌15ページをご参照ください。

